

ドイツにおける日本書籍コレクション ベルリン国立図書館(プロイセン文化財団)を中心に

ヘルガ・ドレスラー (ベルリン国立図書館プロイセン文化財団)
Helga DRESSLER

ドイツ国内及び国際協力による統合への道

最近の政治的な出来事によって世界、特に日本の関心はドイツに向けられた。多くの人々は私達ドイツ人がどのような展望を持っているか、特に日本とドイツの協力について、また世界の他の国々との協力について、ドイツ人がどのような展望を持っているかを知りたがっている。

ドイツの日本文献としては、さまざまな種類の文書記録類、すなわち手稿本、印刷物(書籍と雑誌)、書類、手紙、遺稿、美術品、及び遺品などがある。しかし収集品が美術品として博物館に分類されるか、あるいは印刷美術の産物として図書館に保存されるかはさまざまである。そのためドイツに存在する日本文献の目録をつくる時は、図書館の蔵書ばかりでなく他のコレクションをも考慮する必要がある。ニューメディアが発達して、電子メディアで発表された資料も文献とみなされるようになった。

ドイツの多くの図書館には東アジアコレクションがあるが、その規模も重要さもさまざまである。コレクションの古さと数の点では、日本のものより中国のものの方が優っている。

ドイツにおける日本コレクションは独日関係をそのまま反映している。

ドイツは他のヨーロッパの国々、たとえばポルトガル(1542年)、スペイン、オランダ、あるいはイギリスなどより遅く、19世紀になって初めて日本と直接関係を持った。したがって、ヨーロッパにおける日本コレクションは、他のヨーロッパの国の方がドイツより大きく、また古いわけである。しかし例えばオランダの東インド会社を通じて早くからドイツ人が日本へ渡り、古い価値ある日本書籍がドイツの図書館にもたらされてもいる。

図書館に本が入ってくるのは、まったく個人的関係によることもあり、あるいは個人的興味によることもあり、また偶然の機会によることもあった。意図的に収集するわけではなく寄贈、相続、遺産購入、また蔵書の移動、戦争の結果などでコレクションが増加することもあった。

ドイツの東アジアコレクションには、さまざまな規模やさまざまな価値の日本コレクションがある。

したがって、クラウス・プレッツェル氏(Klaus Pretzell)¹⁾が1976年に西ドイツ連邦共和国の様々な図書館を自ら訪ねて、東アジア文献コレクションの所蔵状態を調査したが、その中には図書館以外の機関が入っていないので不十分であった。その時の資金では大まかな状態を調査するのが精一杯で、コレクションの規模や出所、起源、出資について、調査することはできなかった。彼の調査では価値のある、古い挿絵のある本が美術品として収集されている博物館ははずされている。東ドイツの図書館や個人のコレクションも含まれていない。こうしたコレクションも

これから調査して、目録をつくらなければならない。このような調査は時間がかかるため、特別の助成をうけた事業計画となって初めて実行できるのである。現在進められている総合目録プロジェクト²⁾、³⁾と、所在地を記載した書誌により、ドイツにおける日本コレクションに関する知識は大幅に改善され、さらに拡大されつつある。

原則として、ドイツのコレクションにおけるヨーロッパ言語で書かれた日本関連文献と、日本語の古典文献と日本語の近代文献とは区別する必要がある。それぞれのグループは別々に目録が作成がされるべきである。

ドイツにおける日本コレクションは、独立したコレクションとしてまとめられず、他の東アジア関係の蔵書と一緒に管理されることも少なくない。

ドイツでは中国語コレクションの量は—その歴史的背景のために—日本語コレクションの量よりも多いのである。

この混然とした組織状態が蔵書管理の現状に影響を与えているのである。

ドイツの図書館はドイツの歴史によって形造られてきた。ドイツの歴史の成り行きの中で、中世に行われたドイツの領土分裂が展開した。何世紀もの間、ドイツの諸侯たちは自分の領土における権利を、上位の帝国権力による侵害や影響から護る努力をしてきた。波乱に富んだ浮沈の中で皇帝の権力と無力の歴史を、ドイツ歴史全体を通して見ることができる。共通のドイツ文化政策もないままに、何度となく、中央集権化しようとする試みがなされてきた。

文化連邦的な体制はナチズムの時代をも含むドイツ歴史の流れの中で、失われることはなかった。唯一の例外はドイツ民主共和国における中央集権化した体制であった。ドイツの分割と政治的に異なる体制をとる二つのドイツ国家の形成のために、両ドイツ国家に異なった図書館制度が発展した。ドイツ民主共和国の図書館システムは、中央集権的に組織された国家によって導かれたドイツ民主共和国が崩壊し、新連邦州が連邦共和国の組織構造を受け入れると、連邦制システムに有利にドイツ民主共和国の中央集権体制が消滅し、連邦制になった。

東ドイツの日本コレクションと日本研究は、新たな保護者を得たのである。

こうした前提条件が現在と将来の図書館と日本コレクションに影響をおよぼすのである。

歴史的な現実から見ると、ドイツの大図書館には、国家的なナショナルライブラリーに発展する可能性はない。また新しくナショナルライブラリーが創設されることもなかった。いくつかの図書館が中央集権的な国のナショナルライブラリーが担っている使命をようやくうけいれてきた。

今のべたような理由から、ドイツ連邦共和国における図書館は今日まで連邦州の文化政策の一部であった。連邦文化省や、中央国家文化政策もほとんどなく、連邦州の文化省が存在するだけである。この点でドイツの図書館の組織と責任当局は日本のそれと大幅に違うのである。

ドイツの図書館の財源は主に公の手によって供給され、さまざまな財団、例えばドイツの図書館の特別収集分野プログラムをもつドイツ学術振興会 (Deutsche Forschungs Gemeinschaft DFG) の支援を受けている。私的な資金援助はドイツでは日本に較べて明らかに少ない。ドイツでは、金銭をもらうことにより、学問の自由を出資者が付ける諸条件の犠牲にしなければならないという可能性を恐れているのである。資金が不足する時は、協力により補充しようとした。

教育と研究の促進のため、個々の図書館は一定の収集任務とサービスを引き受ける。ドイツの

図書館が一つの図書館機構の中でお互いに補いあうのである。

近代の東アジア文献の資料収集に関して図書館が分裂するのを避けるために、ドイツ学術振興会の特別収集分野プログラムの中で、集中化し、専門の重点を形成しようとする助成政策を実施してきた。次の図書館が近代東アジア文献を地域の枠を越えて供給している：ベルリン国立図書館、ハノーファー技術情報図書館、ケルン医学専門図書館、キール世界経済研究所図書館。

東アジア及び日本文献の歴史的に増大した古い蔵書の維持と一層の拡張は、この特別収集分野政策にはあげられていなかった。古い日本コレクションの購入はドイツの図書館の一残念ながらしばしば不十分な予算にかかっている。時には個々の図書館が特別財政援助を受けることがある。

最も重要な古書をもつ、最も古い東アジアコレクションは、1558年に創設されたミュンヘンのバイエルン州立図書館（Bayerische Staatsbibliothek）にある。

バイエルンの君主、ヴィッテルスバッハ家が、中国と日本におけるイエズス会の布教を援助したため、すでに17世紀にイエズス会伝道を通じて東アジアの書物や、東アジアに関する書物がミュンヘンにもたらされた。しかし何よりもまず、バイエルン州立図書館は19世紀の中葉以来、広範囲の重要な中国蔵書を買ひ、数年後には当時ヨーロッパ最大の中国図書コレクションを築き上げることができた。

日本と朝鮮の図書や、両国に関する文献は、1945年以後初めてミュンヘンで計画的に購入された。バイエルン州立図書館は古書の購入により恒常的に蔵書を補充する努力をしている。最近では、ドイツ学術擁護協会の特別資金交付により、日本の古版本の特に注目に値する2つのコレクションを手に入れた。現在のところ、ミュンヘンは中国語約10万冊、日本語約6万冊、朝鮮語約7千冊の蔵書を擁しており、そのうち古中国書は1650冊、古日本書は950冊、古朝鮮書は150冊となっている。

第2次大戦後は、自然科学の研究の意義と自然科学を専門文献への要求・需要がますます高まってきたので、収集の重点を自然科学と技術に置く新しい学術図書館が誕生した。これが1959年に設立されたハノーファーの技術情報図書館である。同館は特に自然科学の専門雑誌の購入に力を入れており、1962/63年以来、東アジア言語の自然科学専門雑誌の収集を始めた。現在この技術情報図書館は2500以上の東アジア言語雑誌を保有しており、そのうち約250が中国語、2,000が日本語、約100が朝鮮語の雑誌となっている。

医学の中央専門図書館、経済学の中央専門図書館としては、ケルンの医学中央図書館と、キール大学世界経済研究所図書館兼経済学中央図書館が連邦共和国に設立された。これらは特別収集分野との関係では、東アジアの文献収集を担当している。

ドイツで最も大規模な東アジアコレクションはベルリン国立図書館—プロイセン文化財団—が所有している。こうした発展の過程を見るとドイツの歴史がドイツの大図書館に及ぼした影響—東アジア特別コレクションの成立—地域の枠を超えて機能する東アジア重点コレクションの形成、という経過が、明瞭に読み取れる。

ドイツ史のベルリン国立図書館への影響

私共の図書館は今からちょうど333年前に創立され、その後、本質に関わるような責任機関や

組織の変化を名称にあらわすために、名称を9回変えてきた。はじめは1661年にブランデンブルクの公爵フリードリヒ・ヴィルヘルム大選帝侯 (Friedrich Wilhelm, der Grosse Kurfuerst) が選帝侯図書館 (Churfuerstliche Bibliothek) として設立したのである。

1701年以後、創立者の後継者がプロイセン王に即位すると王立図書館 (Koenigliche Bibliothek) と改名された。1918年に君主制が終焉して、プロイセン国立図書館 (Preussische Staatsbibliothek) と改められた。この図書館はプロイセンの最も重要な図書館として、細かく分岐したプロイセンの国家機構の中で、中心的な役割を担い、ドイツにおける代表的な図書館に発展した。そして、建築家イーネ (Ihne) の設計により、ウンター・デン・リンデン通りに立派な建物が建てられた。

第二次世界大戦中、このベルリンの蔵書は保管のために30以上のドイツ各地に移された。

戦争の終結とともに、1947年、連合国管理委員の決定により解体された。プロイセン国の終焉でもあり、プロイセンの文化的財産は、終戦後ただちに、それぞれの戦勝諸国により没収され、そのため、安全な場所に移されていた書物もすぐにはベルリンのウンター・デン・リンデンの建物へは戻ってこなかった。

ついに二つのドイツの設立というクライマックスを迎えることになったドイツの政治的分離発展の結果、疎開による蔵書の偶然の分割は決定的なものになってしまった。ソビエト軍の占領地区に保管されていた蔵書は、ウンター・デン・リンデン通りの建物に返ってきた。これらは1946年以来、ドイツ民主共和国の新しい文化政策にふさわしく公共学術図書館 (Oeffentliche Wissenschaftliche Bibliothek) の名称で、再び利用可能となった。そしてドイツ民主共和国の国家中央集権化の進行より、ドイツ民主共和国の最も重要な図書館となった。そのことは1954年以後の新しい名称、ドイツ国立図書館 (Deutsche Staatsbibliothek) にはっきり現われている。

西側ドイツでは、1946-1947年に、アメリカ軍占領地区に保管されていた、かつてのプロイセン国立図書館の蔵書の一部を、ラーン河畔のマールブルクに集めた。さらに特に貴重な手稿本蔵書はフランス軍占領地区に保管された。かつてのプロイセンの文化財を維持、発展させるため、1961年に連邦共和国と連邦州が財政援助する公法の連邦直属財団プロイセン文化財団 (Stiftung Preugischer Kulturbesitz) が設立された。これにより、図書館はドイツの文化政策の中で、特別な地位を得ることができた。

図書館は1962年の財団への編入と、ドイツ学術振興協会による気前のいい援助により、連邦共和国の代表的図書館に発展した。ドイツ連邦共和国の図書館全体の中で地域的な枠を超えた使命を数多く担い、1968年にはプロイセン文化財団国立図書館 (Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz) と改称された。財団施設の本拠地はベルリンにある。1967年から1978年にかけてポツダム広場に国立図書館の新しい建物が建てられた。建築家はハンス・シャルン (Hans Scharoun) である。

ドイツ分裂が解消したあと、ドイツ分裂の上に成り立っていた私共の図書館の分裂も解消し、1992年ドイツ国立図書館とプロイセン文化財団国立図書館の統一が実現し、ベルリン国立図書館—プロイセン文化財団 (Staatsbibliothek zu Berlin — Preussischer Kulturbesitz) と正式に改称された。私共の図書館は現在、両図書館の建物を使用して850万冊以上の学術的、多面的文献を保有しております。

ベルリン国立図書館の東アジアコレクション

大選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルム（在位1640—1688年）が、約2万冊の自分の私設図書館を学識ある一般の人々に開放し、ベルリンの居城の一翼にいわゆる選帝侯図書館として創立したとき、自分の侯国のためにオランダの東インド会社を模範とする貿易会社を設立して経済的成果をあげようとも考えた。この時代の多くの人たちと同様、フリードリヒ・ヴィルヘルムは陶磁器愛好家であり、東アジアの珍品コレクターであった。けれども、彼の興味は美術品やコレクションを獲得する域を超えていた。彼は中国とのコンタクトから多くのことを期待しており、ベルリンの主任牧師アンドレアス・ミュラー（Andreas Müller 1630—1694年）と、その侍医クリスチャン・メンツェル（Christian Menzel 1622—1701年）に中国語を学ばせ、極東から書籍を入手するよう指示した。この最初の受け入れは、中国からのもので、図書館の設立の最初の年にすでに行われた。クリスチャン・メンツェルは中国からもたらされた書籍の目録を作成し、印刷させた一私共の図書館、今日のベルリン国立図書館の最初の印刷目録は中国コレクションのリストである。この目録は1685年刊となっている。

図書館創設の時代はすでに日本はヨーロッパ人にとって閉ざされた国になっていた。それでもブランデンブルグ選帝侯の最初の書籍の中に、日本からの真の宝物、いわゆるフローラ・ジャパニカ（Flora japonica）があった。これは1683年に日本で注文され、長崎で日本人によって描かれた1360枚の日本の植物といくつかの鳥を個々に描いた彩色画のコレクションである。この豪華なコレクションは1685年に東インド会社の取り引きルートを経てベルリンに到着し、今日では私共の最も大切にしている貴重書の一つである。

日本との接触は中断されたが、中国への関心は存続し、中国の書物の広範囲な購入へと展開した。ドイツで最も大規模で内容的にも釣合のとれた中国書籍のコレクションがベルリンに誕生したのである。1941年には7万冊のヨーロッパで最大かつ最高のコレクションになっていた。しかし戦争を免れたのは、わずか2万4千冊にすぎなかった。

王立図書館における日本の書物中心の幅広い収集は、プロイセン国が第一次東アジア遠征を行った時に開始されました。1860—1861年、プロイセンの遠征隊がオイレンブルグ伯爵（Friedrich Graf von Eulenburg）の指揮の下で、日本へ向けて航海に乗りだした時、日本がアメリカや他のヨーロッパ諸国に認めたのと同じ特典をドイツとの通商にも認めさせるという目標をもっていました。この時、707名の遠征隊員が日本を訪れました。この中には後の日本大使マックス・フォン・ブランド（Max von Brandt）、フェルディナント・フォン・リヒトホーフェン（Ferdinand von Richthofen）、ルチウス・フォン・バルハウゼン（Lucius von Ballhausen）などがいました。これらの人達の蔵書の遺産購入が可能となったので、その後国立図書館が入手したもののの中に、これらの人物の名が冠せられたものがいくつかあります。

ドイツの図書館がうけた最も大きな打撃は、おそらく第二次世界大戦とそれに直接起因する書籍の紛失でしょう。1941年秋に蔵書の継続的疎開が始まった時、プロイセン国立図書館は400万冊以上の蔵書を擁していました。東アジア書籍は1943年に疎開されました。残念ながら最後の年の実際の蔵書統計はありません。1924年の報告によると、日本コレクションは刊本999冊、巻物22本、手稿本4冊となっています。これに対して中国は刊本44,514冊、手稿本1,719冊です。

1943年には東アジアコレクションは日本の著作1,400部(5,000冊)、中国の著作18,000部(70,000冊)を保有していたということです。移動により日本の蔵書のうち約5,000冊(そのうち日本古書200冊)が西に移され、24,000冊の中国書と日本古書5タイトルが東で保護されました。その他の蔵書の所在は長いこと不明でした。そのうちの大部分は現在のところ、まだクラコーのヤギロニ図書館に保存されています。ベルリンへの返還についての交渉が始まりました。しかし移転の基礎資料を点検してみると、蔵書統計は信頼できず、1,000タイトルの日本古書が行方不明であることが分かりました。これらは現在、ポーランドの疎開地であったホーエンヴァルデに運ばれていたのです。

第二次世界大戦後、かつてのプロイセン国立図書館の東アジア蔵書は、全く異なった発展をとげました。

東ドイツでは、国の外貨統制によって日本からの書物の購入が非常に大きな影響をうけ、資本主義国の文献はごく限られた範囲のものしか入手できなくなりました。社会主義国である中華人民共和国は、最初東ドイツと友好的な関係にあり、これが東ドイツにおける中国研究の奨励とも相まって、中国コレクションの大幅な拡充をもたらしました。北京とモスクワの関係が冷却すると、東ドイツと中華人民共和国の関係もまた後退しました。

その結果、東ドイツにとっては、政府刊行物の交換がいっそう重要になってきました。

ドイツ国立図書館は、日本の民間から2度も重要な援助を受けました。まず、日本の児童書出版社の全出版物が定期的に送られてきましたので、ドイツ国立図書館の児童書部門には日本の児童書コレクションが充実しています。2回目の贈り物は、日本の共産主義者であり、学者の大塚金之助の私蔵図書館のことで、大塚はその思想的信念から、自分の蔵書を寄贈するには、東ドイツこそ理想的と考えたのです。彼の図書12,275冊は、ドイツ国立図書館の日本コレクションの柱をなすものとなりました。

オリエント語ゼミナールの残り蔵書と、ベルリンの日本学者クレメンス・シャルシュミット(Clemens Schaarschmidt)の遺産の一部もドイツ国立図書館に受け入れられました。

旧プロイセン国立図書館の西ドイツの後継図書館でも、西ドイツ地方に疎開されていた蔵書が、1946年から1948年にかけてライン河畔のマルブルクに集められ、かつての東アジア・コレクションの一部分が計画的に再現されました。困難な条件のもとで、常に予算不足に悩まされながら、図書館は新しい収集の道を開き、東アジア諸国との取引関係をつくりあげていきました。

当初はたった一人の図書館職員が、すべての東アジア言語の図書の発注から受入れ、目録作成まで行い、東アジア蔵書を管理していました。しかしドイツ学術振興会が特別収集分野計画のなかで、東アジア特別収集分野を国立図書館に委ねましたので、ようやく東アジア・コレクションに対する政府の姿勢に根本的な変化が訪れました。プロイセン文化財団国立図書館は、32万冊の東アジア言語蔵書と3,000冊の定期刊行物を収集することができました。17-19世紀の日本の木版印刷を含む、さまざまな東アジア学者やコレクターの遺産蔵書によって、日本古書コレクションがかなり増加しました。

特に重要なものは、8-13世紀の貴重な古木版13点のコレクションの寄贈です。その中には、これまでドイツの図書館では見られなかった百万塔陀羅尼一式、奈良、嵯峨、高野版などがあります。

ドイツの再統一後、同じ一つの根から生まれながら、40年以上もの間、別々に別れて発展した二つの図書館を再び統合することに意見が一致しました。何十年にもわたって成長し、階級構造も固定してしまった二つの図書館を統合することは大変なことですが、他の諸部門や特別部門にくらべれば、東アジア部の場合は比較的らくに実行できました。プロイセン文化財団国立図書館には東アジア部がありましたが、ドイツ国立図書館には固有の東アジア部はありませんでした。だから管理構造を統一する必要は無く、ドイツ国立図書館のアジア・アフリカ部に分類されていた東アジア部門がドイツ国立図書館から分離され、国立図書館の東アジア部に統合されたのです。蔵書は現在、ポツダム通りの図書館で通常の開館時間にすべて利用できます。

ドイツ国立図書館の書庫の東アジア言語の文献10万冊が加えられたことにより、ベルリン国立図書館東アジア部の蔵書数は約50万冊になりました。そのうちおよそ15万冊が日本語、35万冊が中国語、3万冊が朝鮮語、満州語、モンゴル語、チベット語です。

両館の蔵書構成が類似しているので、目録を照合して重複本を調査します。蔵書は各タイトル1部に減少し、重複する図書は新連邦州（旧東ドイツ地方に設置された新しい州のこと）に新設された図書館に提供することも検討されています。該当する図書の多くは中国書です。しかしこうした新規の課題は、職員が増員されないと着手出来ません。

日本図書の広域提供のためのベルリン国立図書館東アジア部の課題

a) 収集

1993年には、ベルリン国立図書館東アジア部の収集予算としてDM 1,166,200ドイツマルクが提供されましたが、そのうちの半分は、ドイツ学術振興会という外部財源からの資金です。この資金のうち、65%が日本語資料のために支出されましたが、受入れたのは2,000タイトルにすぎず、これに対して中国からは10,000タイトルの受入れがありました。その他に、日本の雑誌2,000誌（約700部が書店を通して、1,300部が政府刊行物国際交換により）が継続的に受入れされています。中国からも同様1,200誌が入っています。

ベルリン国立図書館は東アジアを重点収集としているので、毎年予算の枠のなかで、人文科学、社会科学、政治学、経済学、東アジアの法律、東アジアの自然科学史などを収集しています。さらに中国学、日本学、朝鮮学、東南アジア学などの専門分野も重点的に充実しています。これらの収集分野はさらに西欧言語の文献により補強されています。それでもベルリン国立図書館の購入は、日本研究のニーズをカバーするにはまだ足りません。

付加的収集源となっているのは、政府刊行物国際交換制度です。ベルリンの国立図書館は非常に早くから日本の政府刊行物を受入れてきました。1868年に新国家形態が確立されるとまもなく、日本は早くも世界の国立図書館に、それも英文の公式政府刊行物を送付しています。こうしてプロイセン国立図書館は、現在では非常に貴重かつ稀少な蔵書を所蔵することになったのです。

二つのドイツ国家の成立とともに、東ドイツと西ドイツの国立図書館の間にも、政府刊行物の交換関係が成立しました。いま両館は再びひとつの図書館に統一されたのです。

政府刊行物交換は、政府刊行物国際交換を軸として開設されました。その業務は政府刊行物部と資料交換部によって行われています。資料交換部は、ユネスコの協定と連邦政府の契約取り決めにより、国、あるいは国の委託を受けた図書館と直接交換関係を結ぶ権利を与えられています。

現在のところ、30カ国と交換協定を結んでいます。日本からは年に1,300種の逐次刊行物と、およそ600タイトルのモノグラフを受入れています。

b) 目録

東アジア部は、人員不足のため、固有の主題分類は行っていません。

国立図書館の豊富な雑誌コレクションは、オリジナルの文字によらず、ローマ字で雑誌名目録に記入されています。1971年以来ベルリン国立図書館には、1978年独立したドイツ図書館研究所 (Deutsches Bibliotheks Institut DBI) との協力により、連邦共和国内に存在する国内および外国雑誌の雑誌目録のデータベースができております。東アジアのコレクションも徐々に雑誌目録データベースに編入されています。

ベルリン国立図書館では、今のところ東アジア部の単行本をまだ伝統的な方法で目録作成し、カードにローマ字による翻字とオリジナル原語文字の両方を記載したアルファベット順書名・著者名目録としています。

プロイセン文化財団国立図書館の日本語、中国語および他の東アジア言語の蔵書目録は印刷目録19冊になっており⁴⁾、新着図書の補遺版も計画されています。しかしこのプロジェクトは、最近の傾向や将来の可能性から見ると、必ずしも妥当なものとはいえません。国立図書館の東アジア部と諸大学の日本学ゼミナール図書館とのネットワーク形成や、総合目録の作成、購入や相互貸借のために共用書誌データを使用する、などを実現すべきでしょう。技術的設備がなく、図書館学教育を受けた図書館員がないという現状を考慮すると、このプロジェクトは特別資金なしには実現できないものです。

日本の図書館におけるコンピュータ導入が中国よりもずっと早く、ハイレベルに達しているにもかかわらず、日本が技術的にヨーロッパや中国とは違った方式を選んだために、今ドイツでは日本のデータよりも中国のデータの方が利用しやすくなっています。一例として、ベルリン国立図書館や、他のドイツ、イギリスの図書館ではすでに、中国の全国書誌データベースを東アジア蔵書の目録作成に使用しています。また、ドイツと中国とのネットワークを通じて、二十五史のデータベースを、ドイツからオンラインで検索することができます。

国立図書館ではなく、ハイデルベルク大学の中国学研究室には大規模な技術設備があるので、日本のデータベースをオンラインで検索することが可能です。すでに1990年に、ドイツ語圏の大学の日本学の現状を紹介した中でクラウス・クラハト氏 (Klaus Kracht)⁵⁾ は、日本の施設との交流において電子情報を全面的に利用するという観点から、大学の日本学研究室計算機センターにつないで、情報提供の道を開いてほしいと要請しました。彼はここで『ヨーロッパの主要な東アジア図書館にペースメーカーの役割』を期待しています。ベルリン国立図書館の東アジア部がこの課題を果たすには、情報技術上の前提条件が満たされず、人員も空間も不足し、政策面でも障害があります。

今日では、大学間にデータ中継ネットがあり、日本学研究室には全く新しい可能性が開かれましたが、国立図書館の東アジア部は、現在のところこのネットワークに参加することができません。

もちろん私どもの図書館には、ヨーロッパ言語の研究のためには、国内・外国のデータベースのオンライン検索にしる、CD-ROMのデータ検索にしる、国際的レベルのすべて可能性が存

在し、国立図書館はすでに100種の CD を利用に供しています。

日本はオンライン・サービスや CD-ROM に記憶させたデータを数多く提供しています。しかし国立図書館は、技術的に中継可能な日本語情報をドイツの利用者に提供することを全くしていません。本来ベルリン国立図書館が東アジアの収集重点を維持する任務を負うということは、同時に、タイミングよく効果的なサービスを行うための前提条件を担当委員会が整えなければならないということも意味しています。しかし東アジア部の人員構成と部の技術的設備の現状では、出来る筈のことが実行できません。

ドイツ最大の図書館、それも大きな東アジア蔵書を持つ図書館だけが、オリジナル文字で書かれた東アジアの図書の目録作成に、電子情報処理を応用することができます。東アジア文字を使わない翻字のみの目録なら作れます。しかし、中国語や日本語のオリジナル文字の情報価値が高いため、ベルリン国立図書館の東アジア部は、東アジア蔵書の目録作業にはオリジナル文字を使用することが必要だとかんがえています。

東アジアの文字表現をドイツ図書館研究所の大計算機にインストールすることはまだ成功していません。ベルリン国立図書館ではそのため、DOS コンピュータにインストールされた、漢字処理に対応できる ALLEGRO というプログラムの力を借りて、ヨーロッパ言語のために使われる IBAS システムとコンパティブルと思われる目録作成を行っています。その場合、国立図書館がディスクセットで購入した中華人民共和国の全国書誌の目録データを使用します。

東アジア部は、同様のことを、日本の全国書誌の助けを借りて行いたいと考えています。すでに CD-ROM の J-BISC が売られています。上に述べたプログラム ALLEGRO は、漢字と日本文字の処理のときに衝突が起らないところまで調整されています。まだ東アジア部に必要な技術的条件が整っていないので、実際にはこのシステムは日本語には適用できません。

c) 相互貸借

日本古図書と特別保護すべき蔵書を除いて、ベルリン国立図書館東アジア部の蔵書は遠隔地相互貸借で貸し出すことができます。この広域利用は、ドイツ学術振興会が振興政策のひとつとして取りあげたものです。

国立図書館は、東アジア文献に関しては、請求票が地域の総合目録をグルリと回る方式では必要以上に遅れることが明らかになったので、1974年以降は、オリジナル言語の文献について国立図書館と関連研究所との間で協定した直接相互貸借サービスを推進しています。このグループには、ドイツ連邦共和国全域の33研究施設だけでなく、オーストリア、スイス、オランダ、ベルギー、スウェーデンの研究施設も参加しています。

国立図書館は、自分の蔵書で間に合わない場合、直接日本に働きかけるための仲介の労をとります。1977年以來東京には、現在の数学ドキュメンテーション協会 (Gesellschaft fuer Mathematik und Datenverarbeitung GMD) の事務所である、学術情報連絡事務所があります。この事務所に所属する日本人女性職員がひとり、日本の図書館で働き、調査活動を行い、コピーをとってドイツへ送付していました。東京の事務所が、国立国会図書館やその他の日本の図書館の蔵書を利用する許可を得たので、受け取った請求票の解決率は75%から89%へと上昇しました。

インフォメーション

国立図書館東アジア部の閲覧室に、主に書誌、事典、参考図書と専門雑誌数種など、合計1万冊の蔵書が備えつけられています。今のところ閲覧室の蔵書はもっぱらレファレンス・ツールです。ベルリン国立図書館東アジア部は、他の図書館のために、東アジア文献についてヨーロッパ言語で解題するサービスにおいても、広域援助を行っています。

私たちドイツの図書館員は、特に国際交換協定の枠内で送られる国立国会図書館の出版物によって、たいへん助けられています。日本全国書誌のような書誌、国立国会図書館の件名目録、国立国会図書館の欧州言語著作物目録、および特殊コレクション目録などの資料のおかげで、私たちの情報サービスが効果的なものになります。

ドイツにおける日本研究書の不足

ドイツの日本研究ニーズにとっては、相互貸借は側面援助的な対策にすぎません。特にドイツ東部における書籍の不足は深刻です。日本研究を可能にするような蔵書が全くと言っていい程なかったのです。

再統一によってベルリン国立図書館の東アジア部では、相互貸借の要求が増加しています。職員構成や設備を改善しない限り、この要求にはとても対応しきれません。

書誌と総合目録による日本関係蔵書の検索

a) 日本に関するヨーロッパ言語出版物の把握

19世紀の末以来、ヨーロッパ言語で書かれた日本関係文献の現在の書誌が、ヴェンクシュテルン (Wenckstern)⁷⁾、ナホト (Nachod)⁸⁾、プレゼント (Praesent)⁸⁾、ヘーニッシュ (Haenisch)⁸⁾ によって出版されました。ヨーロッパ言語で書かれた日本関係図書を登録するだけでなく、1542年ポルトガル人が日本を発見してから、1853年にアメリカ人が強制的に開国するまでの、ヨーロッパで書かれた昔の日本関係文献まで遡及的に収録し、所在データを記載することが必要でした。これによってまず、数少ない日本の古文献は「全欧州諸国図書館蔵書に就き之を網羅する要がある」⁹⁾。だからヨーロッパの総合目録という考えは、すでに1928年に登場したということになります。

その作業が10年間行われましたが、第二次世界大戦勃発間際の国際的緊張の時代には、広範囲にわたる著作の刊行は無理だということが分かり、京都の日本研究所はこの作業成果の公表に踏み切りました。これが1940年に京都で刊行された書誌的な Alt-Japan-Katalog⁹⁾ (古日本目録 1542-1853) です。原稿を回覧する方式で、ドイツとオーストリアの図書館100館と、日本の図書館18館と、ヨーロッパ言語で書かれた日本関係の蔵書を記入しました。

今まであった Nachod、Praesent、Haenisch の日本書誌には、いくらか欠点や欠落があったという経験をふまえて、マリアンネ・コックス氏 (Marianne Kocks) とヴォルフガング・ハダミッツキー氏 (Wolfgang Hadamitzky) の尽力により Japan-Bibliografie²⁾ (日本書誌) の編集が始められ、現在まで継続されてます。これにはドイツ語で書かれた日本関係文献のみが収録されています。

コンピュータを使って作成されるこの書誌は、ヨーロッパと日本の図書館の蔵書を登録しているので、所在データによって、今まで不明だった文献を検索できるし、またドイツの図書館では不可能な件名検索が出来るようになっていきます。

b) ドイツの図書館に所蔵されている手稿本と1868年以前刊行稿の日本語蔵書

一方1982年以來、ドイツ學術振興會の出資による「ドイツにおけるオリент（東洋）の手稿本目録」という目録プロジェクトがあり、その中で、エヴァ・クラフト女史（Eva Kraft）が作成した、ドイツの図書館の日本コレクションを収録した目録5巻³⁾があります。彼女は中国書の日本語訳はこれに収録していません。エヴァ・クラフトはこれまでに、ベルリン、ポッフム、ブレーメン、ハンブルグ、ケルン、ミュンヘンにある古い日本蔵書を採録しました。このプロジェクトは今も続けられています。

国際交流基金（Japan Foundation）は、これと同じ狙いではありますが、もっと広範囲に及ぶ総合目録に資金援助をしています。すなわち、ペーター・コルニキ氏（Peter Kornicki）が1990年から何人かの人と協力して進めている、ヨーロッパに存在する初期日本書籍の総合目録です。この目録作成作業は、所蔵場所のつきとめられる全ヨーロッパの日本古書籍をすべて網羅しています。

c) 近代日本語文献の総合目録

ここではケンブリッジのJapan Library Group¹⁰⁾の総合目録プロジェクトをとりあげます。日本のデータベースNACSIS（National Center of Science and Information Systems）への総合目録の助けを借りて、ケンブリッジ大学に、英国図書館にある日本語蔵書のデータベースが生まれたのです。なるべく多くの外国の参加者がこのデータネットに接続することが期待されています。そうすれば日本最大の図書館データベースのネットワーク化が実現されるからです。

大陸間協力

所蔵数の限られた文献を、図書館協力によって補う試みは、まずローカルなレベルで小規模に始められ、その発展とともに、活動計画が国内、最近ではヨーロッパ中に拡張されてきました。現在では、この拡張の流れを大陸間協力にまで拡大することが期待されています。

学問が国際化すれば、外国が従来以上にドイツのコレクションの利用に関心をむけ、またドイツの学問が外国の研究や資料調査活動の成果に関与しようとする意欲を高める結果ともなります。日本関係では特に情報交換の必要が大きくなってきました。日本側のコンピュータ技術の可能性をよりいっそう活用することにより、ドイツ側の言葉の障害を軽減する努力が行われなければなりません。

1989年、European Association for Japanese Resource Specialists¹¹⁾ EAJRS（日本文献専門家欧州協会）が設立されると、いくつかの広域図書館員活動企画と試験的プロジェクトが生まれました¹²⁾。日本では、日本とドイツの図書館員の協力を課題とする懇談会がつくられ、日独図書館懇談会（Japanisch-Deutsche Bibliothekarische Gesprächsrunde¹³⁾）が作られ、1986年の東京におけるIFLAの折の創立以来、日本とドイツの図書館員を気楽な利益共同体としてひとつにまとめる動きをしています。また日本研究協会（Gesellschaft fuer Japanforschung GJF 1993¹⁴⁾）やDeutsche Gesellschaft fuer Ostasiatische Kunst（ドイツ東アジア美術協会1990¹⁵⁾）

のような、日本研究者が発言の場を持つ学術団体が新設されました。日本とヨーロッパの研究のための源のテーマはここに委員会を持つわけです。

国内及び国際的な広がりで存在するすべての文献を、共同で検索し利用するためのコンピュータ技術の可能性は、過去数年の間に非常に拡大しました。自然科学の分野では、データベースの共同利用を協定すると、ドイツでもいくつかの英語の日本関係データベースが提供されるようになり、日本ではこれと比較にならない程多数のヨーロッパ及びアメリカのデータベースが利用されるようになりました。しかしヨーロッパで日本語のオリジナル言語の情報源を使って研究する際に必要な、日本のオリジナル言語のデータベースを、ドイツの図書館が利用する協定はまだ出来ていません。

日本人とドイツ人にとって、政治、経済のレベルを越えた純粋な関係を強化していくことが重要であれば、できるだけ早く効果的に、いくつかのドイツの図書館で重点的に、これまでの収集の重点を考慮しながら、日本の文献コレクションを充実しなければなりません。ドイツの図書館やドイツの日本研究者には、国際協定にもとづいて日本の文献が拡充され、その利用が促進されることへの期待が高まっています。ベルリン国立図書館東アジア部にも、現在利用できるすべての文献の目録を作成し、提供する任務を引き受けるチャンスが与えられるべきでしょう。この任務を果たすためには、特別収集分野にふさわしい職員構成、技術的設備、相互協定、経済的及び精神的な援助などが前提条件となります。

〔注釈〕

- 1) Pretzell, Klaus Albrecht: Topographie asienskundlicher Schriftensammlungen in der Bundesrepublik Deutschland und Berlin (West). Nebst Korrigenda und Addenda. Hamburg: Institut fuer Asienkunde 1978-1979.
- 2) Hadamitzky, Wolfgang; Kocks, Marianne: Japan-Bibliografie: Verzeichnis deutschsprachiger japanbezogener Veröffentlichungen = Bibliography of Japan. — Muenchen: Saur
Reihe A. Monografien, Zeitschriften, Karten
Bd. 1: 1477-1920. 1990.
Bd. 2. 1921-1950. -1993.
Bd. 3/Teil 1: 1951-1970, 1995.
- 3) Kraft, Eva: Japanische Handschriften und traditionelle Drucke aus der Zeit vor 1868
Bd. 1 in Berlin. 1982
Bd. 2 in Muenchen. 1986.
Bd. 3 in Bonn. Bremen. Hamburg. Koeln. 1988.
Bd. 4: in Bochum. 1990.
Bd. 5 in Muenchen. Neuerwerbungen der Bayerischen Staatsbibliothek. 1994.
(Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland. XXVII, 1-5.).
- 4) Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz, Berlin, Ostasienabteilung: Katalog der Ostasienabteilung. Hrsg. v. Rainer Krempien. — Osnabrueck: Biblio Verlag 1983-1985. Bd. 1-11 Titel; Bd. 12-19 Autoren
- 5) Kracht, Klaus: Japanologie an deutschsprachigen Universitaeten. Wiesbaden: Harrassowitz 1990. 256 S.
- 6) Cordier, H.: Bibliotheca Japonica. Dictionnaire bibliographique des ouvrages relatifs a l'empire japonais par ordre chronologique iusqu'a 1870 suivi d'un appendice renfermant laliste des principaux parus de 1870 a 1912. — Paris: Impr. Nationale 1912. (Publications de l'Ecole des

Langues Orientales Vivantes.)

- 7) Wenckstern, Friedrich von: A bibliography of the Japanese Empire being a classified list of all books, essays and maps in European languages relating to Dai Nihon «Great Japan» publ. in Europe, America and in the East. Comp. by Fr. von Wenckstern. To which is added a fasc. — reprint of Leon Pages: Bibliographie japonaise depuis le XVe siecle jusqu'a 1859. Leiden (2: Tokyo) 1895-1907. Reprint 1. 2. — Stuttgart: Hiersemann 1970.
- 8) Nachod, Oskar (Bd. 5 u. 6: Hans Praesent und Wolf Haenisch): Bibliographie von Japan. Ent. ein ausfuehrliches Verzeichnis der Buecher und Aufsaeetze ueber Japan, die seit dem Ausgang des 2. Bandes von "Wenckstern Bibliography of the Japanese Empire" bis 1926 in euroopaeeischen Sprachen erschienen sind. — Leipzig: Hiersemann
1. 1906-1926. Nr. 1-4019. 1928.
2. 1906-1926. Nr. 4020-9575.
3. 1927-1929. Mit Erg. f. d. Jahre 1906-1926. Nr. 9527-13595, 1931.
4. 1930-1932. Mit Erg. f. d. Jahre 1906-1929. Nr. 13596-18398. 1935.
5. 1933-1935. Mit Erg. f. d. Jahre 1906-1932. Nr. 18399-25376. 1937.
6. 1936-1937. Mit Erg. f. d. Jahre 1906-1935. Nr. 25377-33621. 1940..
- 9) Japan-Institut, Berlin/Deutsches Forschungsinstitut, Kyoto, eds., Bibliographischer Alt-Japan Katalog, 1542-1853. Kyoto, 1940.. S. viii.
- 10) Koyama, Noboru: The Japan Library Group's union catalogue project at Cambridge. in: British Library's occasional papers. 11. Japanese studies. 1990. S. 393-398.
- 11) Koyama, Noboru: The European Association of Japanese Resource Specialists in Historical Perspective. Annual Conference of the Association for Asian Studies. 25-28 March 1993.
- 12) Japanese Information Resources. Eds. Gordon Daniels and Hamish Todd. Papers of the Budapest Conference 5-8 September 1990. European association of Japanese Resource Specialists EAJRS.
- 13) Mitteilungsblatt der Japanisch-Deutschen bibliothekarischen Gespraechrunde 日独図書館懇談会会報 1. 1987, 1 ff.
- 14) Japanforschung. Mitteilungen der Gesellschaft fuer Japanforschung.
- 15) Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft fuer Ostasiatische Kunst. 1. 1988